

ジャマイカの熱い風に踊らされ

阿曾沼 和彦

在ジャマイカ日本国大使館に2度勤務した。2度同じ国に駐在することは比較的まれなケースだと思う。2度めにジャマイカに来る前は、マイアミ。そこで伊藤昌輝総領事に“次はイエメンかジャマイカ”と申し渡された記憶がある。選択の余地なんかあろうはずもなかった。飛行機で1時間30分、おそらく世界中みわたしても最短の勤務地移動だったと思う。

1984年に日本から赴任した1度目。音楽の世界で最も権威のあるアワード“グラミー賞”にジャマイカの音楽“レゲエ”部門が初めて設けられた年である。常識的な範囲の中でグラミー賞の凄さは理解していたが、身近に受賞者がいるとは想像すらしなかった。この時の身近とは、まだ地理的な距離を意味する。わずか500m先にその受賞者が住んでいた。

まあこれも文化交流の一環と解釈して、その受賞者たちSLY&ROBBIEに夕食への招待を申し出た。外交官というステータスが有効に働いたのか、即時で快諾してくれた。この夕食会がきっかけとなり、15年後外務省を退官し、音楽の世界で生きていくことになったのである。

一度目の勤務が終わるまえ、彼らから、一緒にジャマイカで音楽の仕事をしないかとの誘いがあった。長男がまだ1歳になっていなかった頃のことである。妻からは猛烈な反対があった。当たり前の

ことである。一度は諦めた。二度目の勤務終了直前、妻は仕方なく首を縦に振ってくれた。福岡の実家には秘密のままだった。これまでも、音楽に身を置くようになるまでの簡単な経緯である。

さて、ジャマイカとは？ に対する極めて個人的見解を述べてみたい。かつて、スペインと英国の植民地、原住民のアラワクインディアンは植民地時代にほぼ全滅。その後、パナマ運河建設に携わった



朋友 SLY & ROBBIE と筆者（読売新聞提供）

西アフリカからの労働者が流れこんできた。筆者もアフリカでの生活経験がある。かなりの部分でジャマイカとアフリカの共通点を見出すことができる。ただ、地理的にはカリブ海の中心に位置し、アメリカに近い。独立後の50年強で、文化面をはじめ多岐にわたりアメリカの影響を受けてきた。

貧困層が住むゲットーがいたるところに存在している。富裕層は高級車にのり、十分なセキュリティで守られているゲート付きの高級住宅で寝起きしている。発展途上国

にありがちな貧富の差はここにもある。統計的な数字は存在しないが、国民の80%は貧困層に属しているのではないと思う。国土の面積は秋田県とほぼ同じ。人口はジャマイカに居住している数だけを見ると新潟県並。統計上一日約3人が暴力で殺されている。日本でこんな状況が発生すると県知事の辞職では国民は納得するはずもない。が、そこはジャマイカ、国民はこの数字に慣れきっている。政府も何かと前向きに犯罪の減少に力を注いでいる。生活環境、特に治安を中心に考えてみると、お金がなければ、決して住めば都にはならない。反対にお金があれば、十分に幸福感を味わえる“いい国”なのである。

さて筆者はというと、経済状態から見て、中の上あたり。音楽がなければ、レゲエに出会わなければ、今この瞬間イエメンの日本大使館に勤務していたかもしれない。

大使館勤務の傍ら、もちろん勤務時間外、レコーディングスタジオに、かなり高い頻度で足を運んだ。自分自身も楽器をやっていたが、プロの現場に居合わせた経験もなく、この時間は至福の連続であった。音楽制作という技術的な部分はここで学べた。レゲエという音楽ジャンルに陶醉したわけではない。音楽そのものの制作に魅入られたのであった。いつしか、果たして国家公務員と音楽制作の両立は無理かと考えるようになった。本省からの法律に詳しい出張

者に頼んで、音楽制作という創作活動は、例えば本の執筆が許されているように、国家公務員法に抵触しないはずだ、との確認をお願いした。結果は、国家公務員の品位を失わなければ大丈夫であった。ただ、現実的には大使館勤務の時間的制約の中では、この両立は無理であった。なにせお金のかかることなのである。当時は現代のようにコンピューターが制作の中心にあったわけではなく、アナログ機材のみを使用、つまり失敗すればゼロからのやり直し、簡単には趣味だけで終わらせる事のできる世界ではなかった。

1999年、外務省を辞めた。まあ、キャリアでもなかったし、先も見えていた。音楽で優雅な印税生活を夢見ていた。実際、世界的に経済も悪くなく、音楽業界は誰もが売上に微笑んできた時期でもあった。レゲエも日本を含め、多くの先進国で熱狂的に受け入れられていた。誰もが、この状況は長期に渡り続くものと思っていた。今振り返ってみれば、この時が全体として音楽業界のピークであったと思う。

この頃からレゲエも含めた音楽業界の衰退が始まる。マイアミ総領事館に勤務していた1990年台半ば、インターネットが普及しはじめた。当時は、電話機にカプラを取り付けピーヒョロヒョロでの通信。まさか、音楽が将来ダウンロードを中心に販売されるとは、誰が予想できたであろう。皮肉にもデジタルの利便性が音楽業界を経済的にどん底に押しやったのである。レゲエも然りである。

2000年代中盤までは、それでも、そこそこ売れていた。まだ、十分生きていけると皆思っていた。時代が徐々に変化していることに気

づくようになった。ただ、日本からの援助もあったし、なんとかもなる、いや、なんとかなる、と悠長に構えていた。ジャマイカは気候がいいから餓死がない、魚も取れるし、バナナ、マンゴーもいたるところで豊富になっている。実際はそこまでは考えてなかったが。

2005年辺りから、ジャマイカで本格的に音楽制作に打ち込むよ



世界が注目する最も権威ある音楽賞、グラミー賞。今年もレゲエ・アルバム部門で、ジャマイカ在住のプロデューサー阿曾沼和彦 (Kaz Asonuma) 氏の作品「SLY & ROBBIE and THE JAM MASTERS "REGGAE CONNECTION"」が候補になった

うになった。アルバムの第1作目「RHYTHM DOUBLES」がグラミー賞最優秀レゲエアルバム部門にノミネートされた。実はジャマイカ勤務中趣味に関わったアルバム「FRIENDS」がグラミー賞を受賞していたが、「RHYTHM DOUBLES」は職業として制作に携わった最初のアルバムであった。期待はしていたが、ノミネートの可能性は低いと思っていた。確かに寝る時間を惜しんで、作業に取り組んだ。結果、受賞は逃したが、ノミネートされるだけでも、その価値は十分にあると、今でも自負している。僅かではあったが、日本のマスコミにも取り上げられた。外務省をやめても自分の思う道に踏み込んでよかったと思った。

それから、ほぼ1年に1枚のペースでアルバム制作を続けている。徐々に日本人アーティスト、ミュージシャンとの関わりも増やしてきた。グラミーという世界の舞台で日本の存在を少しでもアピールできれば、この思いは、常に持ち続けている。音楽をやる者にとって、レゲエは一度は通ってみたいジャンルである。日本人とて例外ではない。今年2014年第56回グラミー賞最優秀レゲエアルバム部門で、7回目のノミネートを果たすことができた。このアルバム「REGGAE CONNECTION」には10人の日本人アーティストが参加している。みな素晴らしい音楽性を持った方々である。1月26日、ロス・アンジェルス・ステイプルセンターで日本から訪れたアーティストとのみんなとレッドカーペットを歩いた。少し日本に恩返しできたような気がした。

まだまだジャマイカで生きていくことになりそうである。日本にいる妹も含め、グラミー賞受賞できるまで、アルバムを作り続けて欲しいと言われている。音楽を取り巻く状況は決して甘くないが、やるしかない。家族には迷惑のかけ放題、でも未だに外務省を辞めたことを後悔していない自分がある。ジャマイカに感謝している自分がある。

今年はジャマイカ・日本国交成立50周年。先日レゲエをかなりの部分でフィーチャーしたイベント「日本の祭」が行われた。4,000人の人々が集まった。中には多くの日本人も見受けられた。ジャマイカ人も盆踊りに参加した。私も、誰も、ジャマイカの熱い風に踊らされているようであった。

(あそぬま かずひこ)

音楽プロデューサー、在ジャマイカ)